

ウエディング・ラブソディ
～花婿は誰のもの!?～

Mitsuki & Takumi

広瀬もりの

Morino Hirose

termity



エタニティ文庫

目次

ウエディング・ラブソディ 5
～花婿は誰のもの!?!～

書き下ろし番外編
明るい場所へ 335

ウエディング・ラブソディ

～花婿は誰のもの!?～

超高层建筑が建ち並ぶ一角に、忽然と現れた緑の森。

いわゆる大都会の「一等地」にはあまりにも不似合いな風景が、見る者を圧倒する。さらに進んでいくと、とんがり屋根のチャペルが私の前に立ちはだかった。五月の風に吹かれながら、それを見上げる。

荘厳な雰囲気のある正面扉、その上方にはステンドグラス。どこまでも気高く清らかに、すべての者の心を正しい方向に導こうとするように――

「さあ、行きますか！」

ちなみに、私の周りには誰もいない。この言葉は自分自身を奮立たせるために発したものだ。

福原美月、二十歳。

私は今、なけなしの貯金をはたいて買ったばかりの、真っ白なスーツを着ている。デパートでふと目に付いたコレが、運命の一着に見えたのだ。

そう、このスーツはこれからの計画に欠くことができない「戦闘服」。プラス派手なメイクと赤毛のウィッグで武装は完璧だ。

履き慣れないヒールの高い靴で石畳をずかずかと進み、扉の前で立ち止まる。そこで、大きく深呼吸。戻るなら今。でも、私は決してうしろを振り向かない。

――はーんっ！

いきなりドアが開いたからだろう、中にいた人たちが一斉にこちらを振り返る。

真っ赤なカーペットが敷かれた中央通路。それを挟むようにして左右に五、六人ずつ座れる長椅子がずらり。何列あるかまでは数えられなかったけど、そのすべてがぎっしり埋まっている。

そして――

ドアから入って正面。ドラマや映画でよく見る十字架を掲げた祭壇の前に立ち、こちらを振り返って呆然としている新郎新婦。それと、その奥で立ちつくす神父様。

首が痛くなるほど高い天井が見下ろすチャペル内は、水を打ったように静まりかえっている。

こんなにたくさんの人間ががつつりと見つめられるなんて、生まれて初めての経験。でも感慨深い気持ちになっっている暇はなかった。

そう、もう一度、大きく深呼吸。そして、しっかりと顔を上げて。

身体の両脇で握り拳をつくり、私は意を決して口を開いた。

「その結婚っ、ちよっと待った……！」

一瞬、館内の空気がざわっと動いた。それに勇気づけられながら、勢いよく祭壇に向かって走り出す。目指すはただひとり、未だに信じられないという表情で私を見つめている新郎その人。

ええい、ここまで来たら、もうまよよ！

蝶ネクタイで飾られた彼の襟元を掴んで、私は大声で叫んだ。

「ひどい、なんで!? 私のこと、愛しているって言ったじゃない！ それなのに、別の女と結婚するなんて。許せないっ、許せないっしたら、許せない……っ！」

悲鳴に近い声がチャペルの隅々まで響き渡る。

「こっ、こんな女！ 私の方がずっと、ずっとあなたのことを愛しているのに！ なのになのに、なんで……！」

直前に仕込んでおいた目薬が効果を發揮し、頬を一筋の雫が伝っていく。我ながら、臨場感たっぷりの見事な演出だ。

一呼吸おいて、くるりと花嫁の方を振り向いた。たぶん、参列客からは私が彼女のことを睨み付けているように見えるはず。そのことは事前に何度もシミュレーションして確認済み。鏡の前で効果的に見える角度を研究したもの。

「えっ……！」

思わぬ闖入者に度肝を抜かれていた可憐な花嫁は、私の顔をひと目見るなり、小さな叫び声を上げた。

良かった、ちゃんと気づいてくれて。心底ホッとしたものの、私にはまだ、やるべきことが残っている。それを終えるまでは、決して気を抜くわけにはいかない。

『ほらっ、紗耶子さん。早く逃げて！ 表にタクシー待たせてあるから……！』

彼女にしか聞こえないように気をつけながら小声で叫ぶと、次の瞬間、花嫁のベールがひらりと翻った。そして、長いドレスをつまみ上げ、彼女はスローモーションみたいに印象的な動きで正面ドアから外へ——

完璧なまでに劇的なシーン。私は惚れ惚れとしながら彼女の背中を見送った。

その間、一同は呆気にとられたまま。綺麗に着飾りたいかにもお金持ち風の皆様が、口をあぐり開けて固まっている様子はなかなかの見物だった。

さすがは国内外にその名を轟かせる複合企業フジクラ・コーポレーションのひとり息子と、運輸業界では国内売り上げ一位を独走中の杉浦物流のひとり娘の結婚式。招待客のグレードも普通と全然違う。

「……どっ、どういふことだね、これは！ 巧君、説明してくれたまえ……！」

花嫁退場のあと、真っ先に立ち上がったのは一番前の席に座っていた新婦の父親、つ

まり杉浦物流の現社長だった。かなり動揺している様子だが、それでも果敢に切り込んでくる。

いいぞいいぞ、その調子。思う存分暴れてちょうだい。思いつく限りの罵声ばせいで新郎に嘯みついてやって。そして、私はその騒ぎに紛れてさっさと退散——

「大変申し訳ございません、杉浦様」

だがしかし、対する新郎は驚くほど落ち着いていた。

「お集まりの皆様にも大変ご迷惑をおかけしております。ただいま不測の事態が起こりました。つきましては今から十分だけお時間をいただきますと思います」

ヤバイ。こんなに冷静に対応するとは思わなかったぞ。

逆にこつちが慌てふためく羽目に。それでもどうにか逃げ出そうとしたのに、目にもとまらない速さで腕を掴まれてしまった。

「おい、早くこつちへ来い！ 話はそれからだ！」

そのまま、ずるずると引きずられて退場。花嫁の夢を叶えるためのパーシロードが、あつという間に地獄への直通路に取って代わっていた。

「さあ、どういうことか説明してもらおうじゃないか」
連れ込まれたのは誰もいない部屋。

新婦の控え室なのかな。テーブルや椅子、姿見などが所狭しと並べられている。一番奥にあるすごく豪華そうな椅子に、先ほどまで紗耶子さんが座っていたのかもしれない。物珍しくてキョロキョロしている、窓際にある長椅子に座らされた。隣にはもちろん、さつきの男、すなわち新郎がいる。

できることなら今すぐにでも逃げ出したい。せめてコイツともう少し離れたい。けど、がつちりと腕を掴まれたままじゃ、それも不可能だ。

「えっ、……えーとっ、どういうことかと聞かれました……」

私はしどろもどろになりながら答える。

こんな事態おかしに陥るとは思いもしなかった。

結婚式の最中に第三者が乗り込んでいけば、きっと大変な騒ぎになるはず。だからその隙に逃げ出すことなんて簡単。私の作ったシナリオは完璧だったはずだ。

ところがまさか、ここまで簡単に御用になるとは。しかも、花嫁に逃げられたばかりの張本人に。

家同士が勝手に決めた結婚話を、素直に受け入れるような男だ。親に頭の上がらないう気弱なお坊ちゃんだとばかり思っていた。だけど、彼は私が想像していたのとまったく違う。

艶やかな黒髪に切れ長の目、上品な中にも野性的な激しさが見て取れる。身のこなし

は静と動を兼ね備えた剣士のようでもどこにも隙がない。
 こうして並んで座っていると、彼はさらに大きく強靱きょうじんに見える。こんな男に戦いを挑もうとしていたなんて、向こう見ずもいいところだ。

「ほら、ぐずぐずするんじゃない。こっちは時間がないんだ」

彼は俯うつむいたままの私の顎に指をかけ、強引に顔を上げさせる。氷のように冷たく整った顔が私を睨み付けていた。その瞳は怒りに燃えている。

「やはり見覚えのない顔だな。どういふことだ、俺とお前とは今日が初対面だろう」

「は、はあ……そのとおりです」

「だろうな。俺は一度見た顔は忘れないんだ。いったい、どこの馬鹿が迷い込んだのかと思つたぞ」

なまじつか綺麗な顔立ちだから、怒りに満ちてると怖さ倍増すこだった。彼はさらに凄すこみをきかせ、顔を寄せてくる。

「じゃあ、誰に頼まれた？」

間髪を容れずに次の質問が飛んできた。

「え、ええと、だからそれは……」

「こっちは、立場が立場だから敵も多い。返事如何いかんでは、警察に突き出すことになるかもしれないぞ」

けっ、警察……っ!?

いきなり過酷な現実を突きつけられ、私は椅子から飛び上がらんばかりに驚いた。

「だっ、誰に頼まれたとか、そういうのはないです！ これはっ、ただ私の一存で、自分ひとりの考えでやったことですから……!」

「それなら、どうして——」

そこで彼は一度言葉を止めた。再び口を開くまでの時間は、多分コンマ何秒の世界だつたと思う。

「紗耶子、か」

私の顔から、さーっと血の気が引いていく。彼はそれを、冷やかな目でばっちりと確認していた。

「彼女にお前みたいなた品な友人がいたとは驚きだな。知り合いのくせに今日の式に呼ばれていないというのも妙な話だ。それに彼女の友人なら、前もって何人も紹介されたぞ」

「絶対絶命ってこういうこと？ 外堀をどんどん埋められて、逃げ場がなくなっていく。どうしよう、このまま黙ってたら最後は本当に警察に連れていかれてしまう。そんなことになったら、マジでヤバイ。」

でも——それよりなにより、今は少しでも長く時間稼ぎをしなければならぬ。彼女を無事に逃がすことが一番大切。そのために、ただそれだけのために、私はここに乗

り込んだんだから。そうだ、こんなところで負けるもんか。

私は意を決して、口を開いた。

「もっ、元はといえば、あんたがいけないんでしょう？ あんたが紗耶子さんに結婚を申し込んだりしたから、こんなことになったんじゃない！」

「は？ どういうことだ？」

駄目だ、ここでケンカを売ってどうするの。そう思ったものの、暴走を始めた私の口は止まらなかった。

「さ、紗耶子さんは、お兄ちゃんの彼女なんだよ！ ふたりは心から愛し合ってるのに、あんたがいきなり割り込んでくるから。だから私は——」

紗耶子さんの実家、大手運輸会社の杉浦物流が支援するボランティア団体。その活動に参加していたお兄ちゃんは、主催者のひとりとして出席していた彼女と恋に落ちた。身分違いと知りながらもふたりは着実に愛をほぐくみ、密かに将来の約束をしていた。そんなときに持ち上がったのが紗耶子さんの結婚話だ。

業務提携を視野に入れた縁談だから断るわけにはいかないって、紗耶子さんは泣いてた。自分ひとりが犠牲になれば、みんなが幸せになれるって。だけど、私はどうしてもそのまましておけなかったんだ。

「紗耶子さんのおなかには、お兄ちゃんの赤ちゃんがいるんだよ！ それなのにつ、ど

うしてふたりが別れなくちゃならないの。そんなのって……ひどい……！」

ああ、悔しい。思い出ただけで、はらわたが煮えくりかえる。

「だからっ、私は何度もお兄ちゃんと紗耶子さんに提案した。本当に好きならふたりで逃げなよって。どんなに貧しくたって苦しくたって、愛する人とふたりでいればすべてを乗り越えられるんだから、って。でも紗耶子さんは、御両親のことを考えたらそんなことは絶対に無理って言った。紗耶子さんはとても優しい人だもの、愛する家族を悲しませるなんて、できなかつたんだ。お兄ちゃんも紗耶子さんがそこまで言うなら仕方ない、って。だけど、そしたらお兄ちゃんはどうなるの？ そして、おなかの赤ちゃんは……!?!」

「……ふうん、そういうことか」

彼はすべてを承知したと言わんばかりに大きく頷く。その意外とも思える反応に、私はすぐく嬉しくなった。

「は、はいっ、そうなんです！ だからこは、ふたりの幸せのために——」

「ちよっと待て」

喜び勇んで前のめりになった私の言葉を、彼は手で制する。

「俺が理解したのは、お前がどうしようもなく短絡的思考の持ち主で、かつ計画性が無い愚か者だということだ」

背筋が凍り付くような冷たい眼差しが、私に容赦なく降り注ぐ。

「そういうのをエゴって言うんだぞ。お前のせいで、フジクラ・コーポレーションの企業イメージはガタ落ちだ。次期社長である俺がフタマタをかけていた上に、結婚式当日にそれがバレて花嫁に逃げられたなんて、目も当てられない。この先、どの面下げて公の場に出ていけって言うんだ。——この落とし前、どうやって付けてくれる？ おいつ、答えてみる！」

駄目だ、やっぱり全然わかってきてくれなかった。というか、さらに状況が悪化してる。「だっ、だっ、これ以外に方法が……」

にっ、逃げたい！ 今すぐ、ここから逃げ出したい！ でも、相変わらず腕をがっちり掴まれているから無理。

しかも、私は震えるばかりで、これ以上は言葉が出ない。気分はまな板の上の鯉。今にも出刃包丁が落ちてきて息の根を止められてしまいそうだ。

しばらく沈黙が続いたあと、彼は大きな溜息をつき、言った。

「——わかった、紗耶子のことは諦めよう。人の顔に泥を塗りやがって。あんな女、こっちから願い下げだ」

「えっ、本当ですか!？」

「もちろん、無条件でというわけにはいかない。これから俺が出す条件を、お前が受け

入れれば、の話だ」

どうしちゃったんだろう、なんで急に風向きが変わるの？

戸惑いはあるけれど、これはまたとない幸運。彼の気持ちが変わらないうちに話を進めてしまった方がいい。

「はいっ、わかりました！ お兄ちゃんと紗耶子さんのことを許してくれるなら、なんでも言われたとおりにします！ トイレ掃除だって、力仕事だって、ティッシュ配りだって、私はなんだって平気ですから……!」

この人って、本当は思いやりのある、すごくいい人だったりするのかな。ごめん、さっきは悪態ついたりして。あの言葉は全部取り消すから、だからだからっ、本当につ、ありがとう……!」

「お前、名前はなんて言う？」

思わず彼の両手をぎゅーっと握っちゃったりしてね、頑張って親愛の情を示してみた。そしたら急に真顔で見つめ返されて。

「……え？ 美月です。福原美月」

「歳は？」

「今、二十歳です。誕生日が来たら、二十一になりますけど」

「職業は？」

「……フリーターです」

正確に言えば、駅前のハンバーガーショップで、スマイル売ってます！
……って、どうしていきなり職務質問されての？

「あ、あの……」

思わずじーっと彼の顔を見つめちゃった。見れば見るほど綺麗な顔。この前のドラマでSP役をやっていた若手俳優にちよつと似てる。

男は視線をそらすと、しばらく額に手を当ててなにかを考えていた。

やがて、彼がこちらにゆっくりと向き直る。やっぱりちよつと怖い顔。でもこの人ってにっこり笑ったら、すごい爽やか好青年だと思ふなあ……

「福原美月」

「はい」

いきなり名前を呼ばれたから、反射的に返事をした。先ほどまでの成り行きで、私はまだ彼の両手を握りしめたまま。

そこから片方の手を引き抜いた彼が、私の手をゆっくりと包む。同じようにして、もう片方の手も。

こんな風にしてると、まるで愛の告白をしているみたい。そんな馬鹿馬鹿しいことを考えていたら、次の瞬間、彼はにやりと笑った。

「お前、俺の花嫁になれ。これから五分で支度しろ」

2

館内に響き渡る、パイオルガンの生演奏。祭壇の前に立つ、新郎新婦。ふたりを優しく見守る神父様の背後には、美しいステンドグラスがある。そこから注ぎ込む、キラキラの輝き。

きつと光の粒が、私の身を包む純白のウエディングドレスにも舞い降りていることだろう。長いベールが、まるで滝のように床を流れている。

「それでは、指輪の交換を」

私が戸惑っているのがわかったのだろう、神父様がどうしたらいいのか小声で教えてくれる。言われたとおりに左手の白い手袋を外すと、そこに彼が指輪を差し込む。それが終わったら、同じ動作を今度は私から彼へ。

……よしよし、ここまでは順調だぞ。

ホッとしたところで「結婚証明書」に署名。どうしようかと迷ったものの、咄嗟に偽名が思い浮かばなかったから正直に本名を書く。そのときに初めて知ったんだけど、彼は

「藤倉^{ふじくら}巧」っていう名前だった。そうか、「フジクラ・コーポレーション」の跡取り息子だもんね、当然といえば当然。

そのあととも言われるがままにキャンドルに点火。そして、神父様が「結婚とは」みたいな話を始める。私は、神妙な顔をして聞き入っているふりをした。

神父さんも大変だ、いきなり花嫁が変更になったあげく式をそのまま続行するなんてとりあえず表面上は取り繕っているものの、私を見つめる目は明らかに怯えている。また、なにかやらかすんじゃないかと気が気じゃないだろう。

しかも杉浦家側の席には誰もいない。当然のことながら、全員が気分を害して退席してしまったのだ。

花嫁役として式に参加。どう考えてもあり得ない提案だったけど、呆然としているうちにウエディングドレスに着替えさせられていた。

慌てて見つけてきたらしいそれは、悲しいことに胸のあたりがスカスカ。これではいくらなんでも詐欺だろうというレベルまでいっばい詰め物をされて、ようやく格好がついた。

涙と汗で崩れまくってとんでもないことになっていたメイクは、クレンジングからやり直し。光速並のスピードで清楚な花嫁風に塗り替えられる。

最後に髪をトップでひとまとめにして、真っ白なバラをたくさん挿す。その上からペー

ルをかければ、お嫁様の出来上がりだ。

なにしろ時間がないから着替えもスピード重視で、とりあえずそれっぽく見えればいだろうというレベル。姿見に映った私は、自分でも思わず笑っちゃうくらい変だった。もちろん、奴も思い切り噴き出してたよ。……失礼しちゃう。

「では、誓いのキスを」

考えごとをしていたら、神父様の声がすごく遠くで聞こえた。そして、目の前のペー

ルがふわっと上がる。

「……」
目の前——すごく近いところに、あの男の顔がある。失礼なこととかいっばい言われた気もするけど、それもすべて許せちゃうような素敵な笑顔。黒々とした髪を後ろに流して、まるで漆黒の王子様みたいだ。

……って、なんでどんどん近づいてくるの。ちょ、ちょっと……!?

次の瞬間。

パイプオルガンの演奏がまったく聞こえなくなるほどの雄叫びが、館内に大きく響いた。

ごん、と鈍い音と衝撃を額の上で感じる。それで意識が戻った。

「ううう……なにすんのーっ……！」
 気がつくくと、私は先ほどの小さな部屋に戻っていた。どうやら長椅子に寝かされていたらしい。

「それ、飲め」

額に当たっていたのは、ミネラルウォーターのペットボトルだった。青い山並みがプリントされた綺麗なパッケージが目飛び込んでくる。ひんやり気持ちいいそれを受け取ると、私はゆっくり身体を起こした。

「まったく、あんなところで叫び声を上げる奴があるか。大根役者もいいところだぞ。少しは自分の置かれた立場を考えたらどうなんだ」

その台詞に、パチツとスイッチが入った。私はペットボトルを投げ出すと立ち上がり、そのまま男に食ってかかる。

「ちょ、ちよつとっ！ あんた、どつ、どうしてあんなこと。冗談じゃないわよ……！」
 だって、あろうことか、この男つ、私にキスしたんだよ！ しかも、マウス・トゥ・マウスのかなりがっつりしたやつを……！ もーっ、いっぺんで頭に血が昇っちゃって……で、気がついたらこの部屋にきていた、と。

「こつ、公衆の面前で！ なにを考えてるの……！」

こっちは怒りを露わにしてるのに、奴の方は全然動じてない。それどころか、私を小

馬鹿にしたように見下ろして、にやつと笑った。

「ふうん、俺のことがどうしても諦めきれなくて結婚式に単身乗り込んでくるような男、ましいお嬢さんがねえ……あれしきのこととで卒倒するとはこっちがびっくりだ。まさか、初めてだとか言うんじゃないだろうな」

私の顔色が変わったことに気がついたのだろう。彼はさらに嬉しそうな顔になる。

「そうか、そのまさか、か。これからあなたの色に染めてくださいって？ ちよつと面倒な気もするが、男としては悪くない話だな」

私はぎよつとして飛び退いた。

「なっ、なにを言ってるの！ 冗談でもやめて！ 私っ、あんたの出した条件はちゃんとクリアしたでしょう？ だったらっ、もうお役御免のはずだよ！」

花嫁の身代わりはきちんと言ったもの。あとはそっちでどうにかしてください。

幸い、こっちはベールのおかげで招待客に顔は割れないし、最初の登場のときだって、しっかり変装してたから紗耶子さん以外の人には私だってバレてないはずだ。だったら、このまま――

「お役御免？ なに寝ぼけたことを言っている。お前は俺の花嫁だ、神の前で誓ったんだ、もう取り返しはつかないぞ」

「ちょ、ちよつとおつ。話が違うでしょ！」

「俺は政略結婚に屈することなく純愛を貫いた。やり方は多少強引かもしれないが、頭の軽い奴らが喜んで飛びつきそうな話じゃないか。周囲を納得させるのにこれ以上の方法はないぞ。俺はこの先もお前を手放す気はない。そもそもそっちがそれを望んだんじゃないか」

「いや、あれは結婚式をぶち壊すための演技で……」

「そんな言い訳が通用するとも思うか？」

いつの間にか変な方向に話が転がり出している。このまま、コイツのペースに乗せられるわけにはいかない。私は、落ちていたペットボトルを見つけて拾い上げた。

「こっ、これ以上近づいたら、頭から水をぶっかけちゃうから……！」

——と、そのとき。

トントン、とノックの音がして、ドアの向こうからなにやらとても上品な声が出た。

「巧さん？ 入ってもいいかしら」

その言葉に男は背筋をピンと伸ばし、風のようなスピードでドアに駆け寄る。

「どうぞ、お母様。先ほどは大変失礼いたしました。突然のことに驚かれましたよう？」

——なに、いきなり別人！

一瞬前までは言いたい放題だった男の豹変ぶりに、私は半端なく驚いていた。

そうしているうちにドアが開いて、とんでもなくゴージャスな雰囲気的女性が顔を覗

かせる。彼女は眼鏡の奥の目をパチパチと瞬かせながら、大きく首を横に振った。

「いいえ、大きなビジネスにはトラブルがつきものですからね。これくらいのことではこたれていたら藤倉家の女主人は務まりませんよ。ホホ、それにしてもなかなか面白い演出だったこと。わたくし、感激したわ」

上品に着こなした黒留め袖。すつきりとまとめられた髪は隙がなく、それでいておしゃべり心に溢れた斬新な髪型。あれって、絶対にプロの技。まあ、和装なら美容院で着付けてもらってついでに髪もセットするのが普通だけど……もうそこらへんの美容室とは全然技術レベルが違う。

そんな風にぼんやり観察していたら、彼女はすぐ私に気づいた。

「まああつ、あなたが巧さんのお相手の方！ あらあら、可愛らしいことっ！ ええと、

確かお名前は——」

「福原、美月さんです。申し訳ありません、紹介が遅くなってしまっつて」

いつの間にか、男が私の後ろに回り込んでいる。しかも、馴れ馴れしく肩に手を置いたりして、わざとらしさ満載だ。

「美月、こちらが僕の母だよ」

どうしたらいいの、この事態。……って、逃げようがないし。

私はビビりつつも顔を上げて、彼女と向き合った。

すごい、キラキラのオーラがあたりに漂っている。この方が天下のフジクラ・コーポレーションの社長夫人。女性週刊誌にもよく登場する方だ。

こんなに近くで見ても毛穴ひとつ確認できない、ピッカピカのお肌！ そのうえ、覇気が全身から放たれていて、見る者を圧倒する。さすが有名人は違う。

「は、はじめまして……福原美月です」

促されるままに、なんとなく頭を下げちゃったりして。

「ホホホ、いいのよ。そんなに硬くならないでちょうだい。嬉しいわあつ、紗耶子さんとはかなりタイプが違うみたいだけど、とても素敵なお嬢さん。巧さんから聞いたわ、ふたりは出会った瞬間に恋に落ちて強い愛情で結ばれていたって。本当にごめんなさいね、今までずっと辛い思いをさせてしまつて。巧さん、わたくしたちに遠慮してなにも話してくれないんですもの……でも、これからは大丈夫。わたくしはあなた方を心から応援するわ。ドーンと構えていてちょうだい！」

そう言つて私の手をぎゅーっと握りしめる手には、息を呑むほどつかい宝石のついた指輪。よく見れば、帯留めにもなげやらキラキラしたものが並んでるし、髪留めにだつてずらりと。これらがただのガラス玉である可能性は……果てしなくゼロに近いだろう。「それはそうと、体調はもう大丈夫？ 急に倒れるんですもの、驚いたわ。どこか打つたりしてないかしら。やはりお医者様に診せた方がよろしいのでは？」

どうやら、倒れる直前に雄叫びを上げたことはスルーしてくれるようだ。それにしても……

——な、なんでこんなに歓迎されてるの!?

びびりすぎてなにも答えられないでいる私に代わつて、奴がペラペラと説明する。

「いいえ、ご心配には及びませんよ。心労が重なつただけで、身体に大事はないようです。すから。しかしながら、お母様。やはり今日は、これ以上彼女に無理をさせるわけにはいきません。皆様には僕からよくお詫びしますので、どうかご承知ください」

なんでこんなに礼儀正しいの？ というか、すごい他人行儀。加えて言えば、一人称がいつの間にか「僕」に変わつてるし……!

息子の言葉に、フジクラ夫人は大きく頷く。

「そうね、残念だけどそうするしかないわ。披露宴には巧さんがひとりで出席して、美月さんのことは後日改めて皆様にご紹介しましょう。今はなにより、美月さんのお身体を優先しなくては。本当に大丈夫？ あなたは藤倉家の宝よ、万が一のことがあつたら大変だわ」

彼女は私をぎゅーっと抱きしめる。背中を撫でてくれる優しい手のひらは、紛れもなく「お母さん」のそれだった。

「それでは巧さん、そろそろ皆様が披露宴会場へ移動されるわ。あなただけでも外に出

て、ご挨拶なさい」

「はい、わかりました」

「こちらにはナミちゃんを置いていくことにしましょう。美月さん、彼女はうちの屋敷で働いてくれる子なの。遠慮なくなんでも頼んでね」

フジクラ夫人が手招きをすると、メイド姿の女の子が部屋に入ってきた。

パフスリーブのワンピースはしっとりしたえんじのビロード地、そして純白のエプロンドレスにはレースがたくさん付いてる。サラサラの黒髪はまっすぐ肩の下まで伸びて、この上なく清楚なイメージ。

「ナミです。よろしくお願いたします」

彼女はにっこりと微笑んで、楚々^{そそ}と頭を下げた。

「それでは、参りましょうか。巧さん」

「はい、お母様」

彼は畏^{かしこ}まつて頷いたあと、私に顔を向ける。

「美月、君はよけいなことを考えなくていいからね。ここでゆっくり休んでいて。……できるだけ早く戻るよ」

激甘の心遣いはすべて演技。その証拠に、目がぜんぜん笑ってない。

そのあと彼は、ドアの側に立つ「ナミちゃん」にも、「あとを頼んだよ」なんて優し

く声をかけていた。

ふたりの背中がドアの向こうに消えて、ホッと一息。私は長椅子に座り直すと、大きく息を吐き出した。すると、先ほどのメイドさんが駆け寄ってくる。

「あいつ、美月様！ 美月様は本当に情熱的な方なんですわね、私感激しました！」

なんと彼女は私の前に跪^{ひざまず}き、胸の前で手を組む。

「え、ええと……」

あまりの勢いに、言葉に詰まる私。そんな私に彼女は感極まったように叫んだ。

「巧様は本当にお幸せです、こんなに深く愛されて！ 目の前で情熱的なおふたりのやりとりを見ることができて、今日は本当にラッキーでした。私、早くお屋敷に帰って今日のことをみんなに話したくて……もう、さっきからうずうずしているんです」

私の手をぎゅーっと握りしめ、彼女は潤^{うる}んだ目でこちらを熱く見つめてくる。

「私っ、この先なにが起ころうと、美月様の味方です！ おふたりがお幸せになれるよう、全力でサポートさせていただきます！」

すぐに次の手を考えなくてはならないのに、どうも調子が狂う。

私はそのままの姿勢で必死に考えを巡らせた。のんびりはしてられない。いつあの母子が戻ってくるかわからないのだ。その前に、なんとかしてここから逃げ出さなくては。でもどうやって？

焦れば焦るほど、頭の中は混乱するばかり。そんな私にナミちゃんは優しく声をかけてくれる。

「美月様、なにかお飲みになりますか？ あ、その前にまずお召し替えを済ませてしまっただ方がよろしいですね。お手伝いします」

彼女は慣れた手つきでドレスの背中ボタンを外す。ぎゅうぎゅうに締め付けていたコルセットも外してもらうと、一気に楽になった。

スーツ姿に戻った私に、ナミちゃんがオレンジジュースを運んできてくれる。グラスを渡すタイミングも絶妙、彼女の動きには少しの無駄もない。

「ねえ、ナミちゃん」

「はいっ、なんででしょう？」

ドレスを丁寧にハンガーに掛けていた彼女が、嬉しそうに振り向く。疑うことを知らない無垢な笑顔を見ていると、さすがに良心が痛むな。

「あなたって、いくつ？」

私の質問が意外だったらしく、ナミちゃんはとても驚いた顔をした。

「ええと、二十歳です。今年のお正月に成人式でした」

「わ、じゃあ、私たちって同い年だ！」

なんとなく歳が近そうだなって思ったんだよね。ビンゴだったか。

「そうなんですか！ 偶然ですね」

彼女はウエディングドレスをハンガーに掛け終わると、私のそばに戻ってきた。

「美月様、お疲れでしょう？ 披露宴が終わるまでごゆっくりおくつろぎください」

親しみを込めた笑顔で見つめられると、自分がすごく腹黒い人間に思えてくる。だげど駄目、ここで怯むわけにはいかない。

「え、えっと……その前にトイレに行きたくて。ここから一番近いのはどこかな？」

「はい、部屋を出てすぐ左手になります」

「そう、ありがとう」

私は立ち上がると、さりげなくバッグを手にした。

「じゃあ、ちよつと行ってきます」

素早くドアの外に出て、そのままトイレの前を素通り。足音を響かせないように気をつけながら、一気に非常出口まで急いだ。

——ごめん、ナミちゃん！ 別に、あなたに恨みがあるわけじゃないんだよ……！

急いで階段を駆け下りて、その後はただただひた走る。タクシーを捕まえたりしたら、すぐに足が付きそうだし。ここは庶民らしく、電車を使って帰ろう。

頭上に広がる五月の空は、清々^{すがすが}しさと解放感に溢れている。

花嫁の偽物として式に出るといふ予想外のトラブルに見舞われたものの、無事にお天

道様の下に戻ってこられた。紗耶子さん、無事お兄ちゃんと合流できたかな。そうなれば、あとはふたりの幸せを祈るだけ。

私の小さな冒険は、こうしてあっさりと幕を下ろすはずだった。少なくとも私自身はそうなると信じ切っていたんだけど――

3

「あら、美月。おはよう、具合はもう大丈夫？」

翌日、いつもどおりの時間にキッチンに入っていくと、母親が目をまん丸にした。

「うん。今日もバイト入ってるし」

私はさっさと自分の席に座ってトースターに食パンを突っ込む。でも向かいに座る母親は、まだ心配そうな顔をしていた。

「あまり無理しない方がいいわよ。あんたが晩ご飯も食べないで寝てしまうなんて、本当に驚いたんだから。外出先でなにか悪い病気をもらってきたんじゃないの？」

「そんなんじゃないって。昨日はちよつと疲れてただけ！」

父親と妹は、もうそれぞれ仕事と学校に出かけたらしい。ふたりの食器は洗われ、か

ごに伏せて置かれている。

「そう？　ならいいんだけど」

母親は小さく溜息をついたあと、お皿にかかっているラップを外してくれた。

「それにしても美月、昨日のあんたはかなり変だったわよ。あんな真つ赤なかつらを被って、メイクもすごい塗りたくって。まさか、仮装行列にでも参加してたんじゃないでしょうね」

「お母さん、かつらじゃなくてウィッグ。もう、何度言ったらわかるの？」

私は母親の追撃をさらつと流してお箸を手にした。

ハムエッグにレタス、ちよつとだけマカロニサラダ。いつもの朝食プレートだ。タイムング良くトーストも焼き上がる。

それらを黙々と口に運びながら、私は昨日の惨事を思い出していた。

確かに、昨日の「アレ」は半端なかつたと思う。たった一時間かそこの出来事だったのに、体力、精神力ともに甚だしく吸い取られた。

逃亡中は、サンダラスに黒ずくめの男たちが追ってきたらどうしようかとビクビクしたけど、そんなドラマティックな展開が起ることもなく、あっさりと自宅に到着。とにかく無事に戻ってこられて本当に良かった。

「じゃ、そろそろ時間だから、行ってきま〜すっ！」

まだまだなにか言いたげな母親の視線を振り切って、席を立つ。玄関に向かう途中、壁に掛かった姿見で全身チェック。バイト先では制服着用だから、着替えやすいようにシンプルなスウェット素材のスーツが定番だ。短めの上着とひざ上丈スカートはレモンイエロー。これじゃ、短大に通っていた頃と大して変わらない。

——あのままにも起こらなければ、今頃は希望の職場で忙しく働いていたはずなのに……

鏡に映った自分が悲しげに顔を歪めたのを見て、私は大きく首を振った。

駄目駄目、過去は振り返らない。後悔したところで、なにも始まらないんだから。「今」と「未来」を思い切り生きるだけ。たくさんたくさん泣いて、そう決めた。

今日もピーカンのいい天気。一足早く初夏の香りを感じさせる街に、私は元気良く飛び出していった。

お昼どきの飲食店は、どこもさながら戦場のよう。それは私のバイト先であるハンバーガーショップでも例外ではない。

「ニコニコバーガーセットをおひとつですね、かしこまりました。お飲み物はなににいたしますか？ サラダのドレッシングをこちらの三つの中からお選びください！」

カウンターの前では、私は明るく元気な販売員。赤と白のストライプ模様の制服に同

色の帽子。髪も後ろでふたつにまとめている。

笑顔でお客様の対応をしつつ、手元のタッチパネルに注文の内容を入力していく。私の声を聞きつけたバックのスタッフたちが品物を次々にトレーに載せてくれるから、それをひとつひとつチェックしていけばいい。

「四百五十円のお返しです。それではごゆっくりお召し上がりくださいませ」

無事に品物をお渡しして、任務終了。トレイを手にしたお客様がこちらに背中を向ける頃には、笑顔がガッチガチに固まってまったく動かなくなっていた。

さすがに疲れてきたけど、そろそろピークは過ぎた。休憩時間まであとちょっとだけ頑張ればいい。

平日の昼間にしては、まずまずの客の入り。チビッコの姿がヤケに多いと思ったら、今日は近所の小学校が運動会の代休でお休みのようだ。キッズセットのおまけが少なくなってきたから、あとで補充しておかなくちゃ。

「美月さん、ポテトの追加はどうしましょうか？」

「パテはこれだけあれば、大丈夫ですか？」

一息つく間もなく、キッチンから次々とスタッフの声が飛んでくる。ここでのバイトも三年目、いつの間にか「チーフ」と呼ばれる立場になってたりする。短大に通っていた二年間は、別のバイトをかけ持ちしていたから早朝シフトが中心だったけど、今はお

昼どきを含めた八時間と、場合によっては残業もプラス。あの頃に比べると、かなり長時間勤務になっている。

「えーと、ポテトとパテは今のところOK。レタスとトマトのストックをもう一パック作っておいて。それからドリンクの氷もお願ひ」

私は素早く指示を出しながら、伸び上がった客席の様子を確認する。

そろそろテーブルが空いてきた。お客さんが途切れたら、レジを代わってもらって掃除をしよう。

……とか考えていたら。

「あーっ、福原ちゃん。ちよつといいかな？」

いきなり店長が表に出てきた。こんな時間に珍しい。普段なら、もう少し空^すいてくるまで事務所に籠もっているのに。

「はいっ、なんででしょう。売り上げでしたら、今日もまずまずですよ」

まあ、店長が気にするならこのあたりかなって。でも、今日は違ったみたい。

「もう、そんなことはないから。とりあえず、そこは誰かに代わってもらってすぐ裏まで来て」

「えっ、でも。そろそろ休憩に入りますし、それからでも」

「いや、とにかく急いでほしいんだ」

そう言いながら、店長はいつにも増してそわそわしてる。

「そうですか、では」

もしかして時給アップのお知らせかな。だったら大歓迎なんだけど。そんなことを考えながら、普段どおりのノリで元気に事務所のドアを開けた。

「失礼しまーす」

でも奥の席に座っている人物を確認して、私の背筋が無意識のうちにピンと伸びる。「わっ、これは本部の……、ご、ご無沙汰しております！」

どうして本部役員の方がこちらに？ まさか抜き打ち検査とか？ 別に後ろ暗いところがあるわけじゃないけど、それでも不安になってしまう。

「君が福原美月くんだね？ とりあえず、そこに座りなさい」

促^{うなが}されるままに腰を下ろした私の背後で、店長が「どうしよ、どうしよ」と呟^{つぶや}きながら、おろおろ歩き回ってる。

本部役員さん（申し訳ないことに名前が思い出せない）は、制服姿の私をじーっと見つめてくる。このままだと私の身体に穴が空いてしまうんじゃないかと心配になりかけた頃、彼はおもむろに口を開いた。

「単刀直入に言わせてもらおう。突然のことで申し訳ないが、福原くんにはここを辞めただけでなくしてはならない。本来ならば解雇の一ヶ月前に勧告する規則になっている

が、今回ばかりは仕方ない。諦めてほしい」

「……は？」

いきなりの一撃に一瞬固まったものの、慌てて聞き返した。

「どっ、どどど……どうしてですか！ 理由をおっしゃってください、このままでは私、納得できません……っ！」

いいよね、これくらい強く出ちゃったって。

「だけど、敵も然る者。本部役員さんは、ゆつたりとした微笑みを少しも崩すことなく答える。

「理由？ それは、君自身の胸に手を当てて考えてみたらどうかね？ 社会勉強とか、いろいろ理由はおありだと思いが、こちらの立場になって考えてみてほしいものだね。そうすれば、自ずと答えは出てくるはずだ」

「ええっ、そ、そんなことを言われなくても……」

しどろもどろになりながらも、なんとか反論。この仕事までクビになったら、私はどうしたらいいの。実家住まいとはいっても自分の使うお金くらいは稼ぎたいのに。

今までずっと頑張ってきたんだよ、在庫チェックも新人指導も掃除も、ほぼ完璧にこなしてきた。少なくとも、私の背後をうろついている店長の十倍、いや二十倍はこの店に貢献していると思う。それなのに、どうして。

「君は本来あるべき場所に戻りなさい。そうすることが一番正しいと思いますよ？」

「……はあ？」

もつともらしい言葉を並べて満足なさったのか、名前のわからない本部役員さんは、すつと立ち上がるとドアに向かって歩き出す。それを見て、私も慌てて立ち上がった。

「ちよっ、ちよっど待ってください！ まだ、話が終わってません——」

私の訴えを完全無視していた彼は、ドアノブに手をかけてから、ようやくこちらを振り向く。そして笑顔のまま、ゆつくりとドアを開いた。

そこに、現れたのは——

「やあ、美月」

「えっ、えええっ！ ど、どうして……!？」

慌てて後ずさったものの、この部屋の出入り口はひとつだけ。そこを塞がれてしまつたら、もう逃げようがないわけ……

「ずいぶん探したんだよ、美月。さあ、一緒に帰ろう」

不安が安堵に変わるその瞬間を完璧に周囲に知らしめる、迫真の演技。愛情に満ちあふれた眼差しが私に向けられる。

ドアの向こうに立っていたのは、昨日のタキシードから一転、ダークブルーのスーツを着込んだあの男だった。

藤倉巧、二十八歳。フジクラ・コーポレーション本社開発部次長。現社長のひとり息子で大学院修了後に渡米、経営学を学ぶ。その後、現地企業での研修を経て日本には昨春戻ってきたばかり。フジクラ・コーポレーション入社後はすぐに頭角を現し、社内外での信頼も得て、着実にその立ち位置を固めつつある——

敵と戦うにはまず情報を手に入れなければ。気づくのがあまりに遅すぎたけど、昨日自宅に戻ってからここまでではどうにか調べた。

「ずいぶんと好き勝手やってくれたものだな。お前の思慮の浅さは特別天然記念物ものだ。ここまで馬鹿な動物は、なかなかお目にかかれない。少しは周囲の迷惑を考えたらどうだ」

店の前に横付けされていた黒塗りの車に、着替えもそこそこに押し込まれる。運転席と後部座席との間の分厚いカーテンをリモコンで閉じた瞬間、彼の態度はそれまでの親愛に満ちたものから一変した。

いきなり人のことを希少な珍獣扱いしてくるあたり、ムカつくつたらない。

「あんたねっ、こんなこととしてタダで済むと思ってるの？ 今度はそっちが警察に突き出される番になるんだからっ！ テレビとか新聞とかに、顔写真が大きく載っちゃってっ知らないよ。会社にも自宅にも嫌がらせの電話がバンバンかかってきちゃうから。」

そしたら、ほら、企業イメージってやつがすっごく悪くなるんだよ……！」

だったら、こっちだって容赦しない。悪いけど、口喧嘩だったらそう簡単には負けない自信がある。

「ふーん、……優しいねえ、一応はこっちの心配をしてくれるんだ」

しかし彼は、私の一撃をするりとかわしてしまふ。整いすぎた顔に浮かんだ微笑みは、真冬の月の光よりも冷ややかだった。

「だけど、大丈夫だ。今回の場合、俺に落ち度はない。迷子の花嫁を探し出して、自宅に連れ帰るだけだからな。警察なんて、そもそも介入するはずがないじゃないか。お前だって知っているだろう、夫婦喧嘩は犬も食わないって言葉を」

「えっ、なんなのそれ。どういうこと？」

恐る恐る訊ねたら、彼は待つてましたとばかりに答える。

「この車が向かっているのは藤倉の屋敷だ。お前の帰る家がそれ以外にあるわけないだろう」

私は全身からサーッと血の気が引く音を聞いた。

「ぎゃーっ、ちょっと待って！ 降りますっ、降りしてください！ やだっ、人さらい！ この最低男……っ！」

もう必死だった。ドアや窓ガラスをゴンゴン叩いたり、それでも駄目なら足で蹴った

り。とにかく、必死に「助けてください」アピールをしてみる。だけど私たちを乗せたこの車は恐ろしく頑丈で、それくらいのことじゃびくともしない。そうこうしているうちに、自分の手や足の方が痛くなってきた。

「見苦しいぞ、いい加減にしろ」

男は腕を組んで、そっぽを向いている。

人のことを勝手に拉致しておきながら、その態度はないだろう。自分が全部正しくて、こつちが間違っていると言わんばかりだ。

もう二度と会うことはないと思っていたのに、あんな経験は記憶から永遠に葬り去るつもりだったのに——昨日の今日で再び登場って、どういうこと？

そのあとしばらく沈黙が続いた。でもそうしているうちにも、車はどんどん目的地に近づいていると思うと気が気じゃない。とうとう我慢できなくなって、自分からふたたび口を開いてしまった。

「……あのだ」

広い後部座席の両端にそれぞれが陣取っているという、とても妙な状況。私は、窓の外に顔を向けたままの男に嫌々話しかけた。

「そ、そりゃあ、ちよつとは悪かったと思ってるよ。でも、こんなのってあり得ないじゃない。なんで、私が紗耶子さんの代わりにあんたと結婚しなくちゃならないの。思いつ

きだけで行動すると、絶対に後悔するんだからね」

「その言葉、そっくりそのままお前に返してやるぞ」

車は大きな橋を渡っていく。男は相変わらず窓の外を見ていた。

「今現在、立場が危ういのはどう考えてもそっちだ」

「——は？」

なに言ってるの、この人。

すぐに言い返してやろうと思っただけど、その前に奴がこちらを振り向く。自分は絶対に間違っていない、そんな自信を顔全体に貼り付けて。

「紗耶子はあるまま姿をくましましたらしいな。杉浦の家では今、ちまな血眼になってあいつの行方を探している」

彼の眼差しが、私の心のど真ん中を貫いていく。

「お前は自分が今、どれほど危険な状態にあるのかがまったくわかっていないようだな。このまま紗耶子が見つからなければ、あいつらは間違いないくお前に目を向けるだろう。

杉浦家のえげつないやり方はこの業界では有名だ。場合によっては、臓器まで抜かれるぞ。しかもお前だけじゃない、家族にも親族にも被害が及ぶ」

「えええつ、……そ、そんなっ!? で、でも、私っ! 昨日はちゃんと変装してたし……」

「あれで正体を誤魔化したつもりとは、本当におめでたい奴だ。今日の午前中にはすで

に杉浦の手下がお前の自宅を見張っているのを確認したぞ」

男は吐き捨てるように言うと、さらに私をきつく睨み付けてきた。

「お前が身を守るには、俺に匿かくまわれるしかない。さすがの杉浦も藤倉の親族となった者たちに手出しはできないだろうからな。そうでもしなければ命の保証はないぞ」

私の中に過去の恐怖が浮かび上がってきた。……権力を持つ人たちの容赦ないやり方は嫌というほど知っている。背中を生ぬるい汗が流れていた。

決定的な一撃を落としたあとで、彼は不信任感いっぱいの眼差しを向けてきた。

「だが、お前はまったく信用できない。だいたい、なんだ？ お前はふたり姉妹で、兄貴なんていないじゃないか。なにが『お兄ちゃん』だ、笑わせるな」

しかも奴は、こつちが教えていない個人情報をさらっと口にしたりする。

「すべてお前のひとり芝居だったんだな、大根役者のくせにやることだけは大胆だ」

「え、ええと……」

そこまできて、ようやく気づいた。

この男、どうして私の居所がわかったの？ うっかり本名を教えちゃったのは大失敗だったけど、それだけのことですぐに足が付くとは思えない。

私の疑問を察したのだろう、男はあっさり手の内を明かす。

「福原美月、二十歳。話し方からして、十中八九関東圏の人間。そこまでわかれば、あ

とはこつちのものだ。あのハンバーガーチェーンが我が社の傘下企業で良かった。おかげでトラブルもなく、すぐに話が付いた」

そこまで言うと、彼は勝ち誇ったように笑う。

「お前の運命は今、すべて俺の手の中にある。それを決して忘れるんじゃないぞ。——で、こつちも多少状況が変わった。紗耶子自身にはなんの未練もないが、あいつはとんでもないものを持ち去りやがった。フジクラの所有する、ある一帯の土地の権利書だ。あれを勝手に使われたら面倒なことになる。杉浦の親父の手にも渡ったらそれこそ一大事だ。さあ、あの女の居場所を吐け！ 今すぐに！」

「そつ、そんなこと言っちゃって」

怖い顔で睨み付けられても、どうしようもない。

「た、確かに私は、紗耶子さんの逃亡の片棒を担かかいだよ？ でもでも、あれからなんの連絡もないし、どうなってるかなんてわからない。今まで使っていたふたりの携帯はすでに解約されてるし、こつちからは連絡の取りようがないんだから仕方ないじゃないわ、私だって、昨日からずつと心配しているんだよ……！」

「この期に及んで、言い逃れができるとでも思ってるのか。こつちが下手に出れば、いい気になりやがって——」

すごい顔で睨まれて、もうちよつとで胸ぐらを掴まれそうになった、ちよつどそのと

き——窓の外に腰が抜けるくらい大きなお屋敷が現れた。

「もう到着か。……仕方ない、一時休戦だな」

「どうも獯猛なトラを何十匹も閉じこめていと言われたら信じちゃいそうなくらい頑丈な鉄門。その前で車は一度停車する。すると、微動だにしなさそうだった門がするすると左下に開いていく。

再び車が動き出すと、彼はスーツの前を整えながら静かに言った。

「くれぐれも、早まった真似をするんじゃないぞ。こつちには人質がいるんだからな」

4

昨日、私がしでかした一連の出来事は、どこからどう見ても褒められたもんじゃない。正直、あの場にいた関係者には誰一人として会いたくない。

——このままでいたら、嬉しくない再会が待っている。もう、目の前まで来ている。「むっ、……むむむ、無理っ！ いったい、この先、どんな態度を取れっというの」

焦りまくる私に対し、冷静すぎる男の一撃。

「大丈夫だ、お前が起こした不祥事についてはすべて手を打ってある。余計なことは言

わず、適当に話を合わせていろ」

慰めにもならない言葉を聞いているうちに、車は大きなお屋敷の前に到着。

左右にどーんと広がる白壁の建物は、まるで西洋の古城のよう。数え切れないほどのくさんの窓に、美しい装飾を施したバルコニー、とんがり屋根はライトブルーで、某テーマパークのお城を思い出す。

表の庭には大輪のバラをはじめ、季節の花が美しく咲き乱れていた。綺麗に刈り込まれた芝生。大きな噴水からは水しぶきが上がり、その溢れた水が小川となって敷地を流れていく。向こうに見えるのは果樹園だろうか。

フジクラ・コーポレーションは海外にも広く名前を知られている複合企業。それだけに、やっぱとんでもないお金持ちだ。学生時代にやっていたバイトの関係でいろんな資産家の邸宅に入ったことがあったけど、ここはそのどれよりもすごい。明らかに群を抜いている。

この屋敷を維持するだけでどれだけお金がかかるんだろうか。庶民の性さがでついつい考えてしまう。

その建物の中央、ここを玄関と呼んでしまってもいいのだろうか？ とにかく広い広い入り口の左右にメイド服を着た女性たちがずらりと並んでいた。たぶん、二十人近く？

「おかえりなさいませ。巧様、美月様」

そして、その全員が声を揃えてこう言うんだから、これまたすごい迫力！ しかも、お辞儀のタイミングや角度までがすべて一緒。どれくらい練習を重ねたらここまでの仕上がりになるんだろう。

「……あっ、あのっ……」

「いいから。とにかく今は前へ進め」

足がすくんで歩けなくなっていた私を、彼は必ずずると引きずって行く。

今日の私は洗いざらしのスウェットスーツ。これじゃ、あまりに場違いすぎて泣けてくる。

長い長い玄関がやっと終わって、目の前に両開きの重厚な扉が現れた。その前に控えていたのはびつちりと黒いスーツを着込んだふたりのダンディなおじさま。襟元には蝶ネクタイ、これって……噂に聞く「執事」って呼ばれる人たち！

静かに厳かに扉が開かれる。と、中から急に明るい声が飛んできた。

「きゃーっ、美月様！ おかえりなさいませっ。もうお加減はよろしいのですか？ 私、とてもとても心配したんですよーっ！」

現れたのは、昨日のメイドさん。たしか、ナミちゃんっていったっけ？

いきなり、がばっと抱きつかれたりして、感動の再会シーンみたいになってる。

「えっ、えっ？ これって——」

「すみませんっ、私が至らないばかりにこんなことになってしまっ！ でも良かった、本当に良かった！」

「わけがわからないまま呆氣にとられていると、さらにもうひとつの人影が颯爽と現れる。いわずと知れた、フジクラ社長夫人だ。

「……んまあっ、美月さん！ 良かった、もうすっかり回復されたみたいね！ 私、胸が潰れるかと思うくらい心配したのよ。元気なお顔を見られて本当にホッとしたわ」

驚いたことに、こちらも全然怒ってない。それどころか、私との再会を喜んで、熱烈歓迎してくれている。想像もしなかった成り行きに、私はただただ呆然とするばかり。

「じゃあ、巧さんは美月さんをリビングにご案内して。私たちはもう一度、キッチンを確認してきますね」

ふたりが長い廊下の向こうに消えると、傍らにいた男がにやーっと笑った。

「ほら、ざっとこんなもんだ」

そして、話してくれたコトの全容は次のとおり。

昨日、あの小部屋をあとにした私はトイレの前で倒れたところを従業員に見送られ、病院に搬送された。そのまま検査のために一晩の入院を申し渡されてしまい、しかも面会謝絶でお見舞いも付き添いも一切アウト。そして、さきほどようやく退院してきた——というシナリオが勝手に作られて、まことしやかに吹聴されたらしい。

「俺が海よりも広く深い心の持ち主であったことに感謝するんだな」とかなんとか、わざわざ付け加えてたりするけど。

「べつ、別に私は頼んだ覚えもないしっ……!」

「そんなに尖らなくていいだろう。いい加減、俺の有能さを素直に認めろ」

よくもまあ、こんなでたらのめ話を周りの人が信じたものだと感じる。この男は家族をはじめ屋敷の皆に絶大な信用があるらしい。なんか借りができちゃったみたいで悔しいけど、とりあえずは助かった。

それにしても、この建物は外観だけじゃなくて内部もすごい。長い長い通路に同じようなドアや扉がたくさん並んでいて、どこがなんの部屋なのか見当もつかない。まるで巨大迷路だ。そのうえ天井にも壁にも美しい装飾が施されている。

私はすでにどこをどう通ってここまで辿り着いたのか、わからなくなっていた。そんな私に気がついたのだろう、奴はニヤリと笑って口を開く。

「驚くのはまだ早い。こんなの、ほんの序の口だということがすぐにわかるぞ」

すごく悔しいけど、コイツが口になると、どんなことでももつともらしく聞こえる。なんでいちいちそんなに偉そうなの？ まったく理解に苦しむ。

「さあここの、入れ」

とりあえず、ドアは奴が開けてくれるらしい。まあ、こんなことされたくらいで感激

するような私じゃないけど。

ドアが開いたら、今度は目の前に現れた大広間に愕然^{がせえん}。

天井は普通の家の二倍も三倍も高く、その上から「落ちてきたらかなりヤバイぞ」ってレベルの豪華なシャンデリアがいくつも吊り下げられている。

しかも圧巻なのは、中央にどーんと置かれたダイニングテーブル。いっぺんに三十人は座れてしまいそうなほど大きい。これじゃ、端と端に座った人間はアイコンタクトすらできないと思う。

さらに向こうにはだだっ広いスペースがあって、その中央に巨大なグランドピアノが鎮座していた。壁から少し離して並べられているソファには、全部で何十人が座れるんだろう。とにかく有名ホテルのラウンジよりもずっとずっと規模が大きいだけは確か。

「……」

度肝を抜かれたのは、それらの豪華すぎる内装ではなく、まったく別のところだった。

「まあっ、美月!」

巨大なテーブルの片隅。借りてきた猫状態でちょこんと座っていたのは、なんと私の母親。これが驚かなくてどうしますかって感じ。

「……えええっ! どっ、どうして——」

でも、母親の方は私以上に信じられないって言いたげな顔をしている。

「……んもうっ、美月！ まさか、あんたがフジクラ・コーポレーションのご子息と親密なお付き合いをしていたなんてびっくりよ。どうしてこんな大切なことを今まで黙っていたの！ しかも結婚式に乱入したなんて……」

母親が身につけているのは、先日親戚の結婚式用に購入した「張羅いっせろ。慣れない服を着ているから、ますます場違いに見えるのかも。

「お母さん、もう腰が抜けて抜けて、くったくたになっちゃったわよ」
母親はその言葉どおり今にも泣き出しそう。

人質って、このことだったんだね。さすがに手を回しすぎだよ。

「え、ええと……ごめんなさい！ これには、実は深い理由が……」

とにかく驚くやら申し訳ないやらで、おろおろしてしまう。そんな私の脇をすり抜け、ずいっと存在を示した男がひとり。

出た、外面モード。

奴はお得意の親愛に満ちた笑みを浮かべて、私の母親に話しかける。

「さきほどは大変失礼いたしました。どうですか、こちらではおくつろぎいただけられますか？」

いきなりモードチェンジするんだから、こっちは慌ててしまう。

だけど母親は、残念ながらこの男の本性がまったくわかっていないようだ。

「はい、ありがとうございます。とてもよくしていただいています」

もしかして、彼にうっとりで見とれてたりします？ やだもう、お母さんって人を見る目がなさすぎだよ！

「それは良かった。このたびは突然のことで驚かれましたと思いますが、今後も余計なお心遣いなど無用ですよ。お義母様かあさまには、僕のことを実の息子として扱っていただけたらと思っております」

またそんな、誤解を広げるようなことを。まずい、母親の目がハートになってる。

お願いだから、これ以上余計なことは言わないで……！

「で、でも、フジクラのご子息にとってもそのような……」

「どうか他人行儀な態度はおやめください。これからは、僕のことを『巧』と呼んでいただけたら嬉しいですよ」

だんだん話が変な方向に進んでいく。なんだか、聞いているこっちが鳥肌立ってきちゃう。「そっ、そうですか。では是非、今後はそのように……」

母親は、もうガツガチ。申し訳なさすぎて泣けてくる。

この男、善良な市民になんてことを！ 私はなにをされても仕方のない身の上だけど、だからといって母親まで巻き込むことはないじゃない。

——とか思ってた。急に、母親がスウェットスーツの袖をくいくいと引っ張った。

「ねえねえっ、美月！」

とにかくここに座りなさいって、隣の席を勧められる。仕方がないから言われたとおりにすると、母親が耳打ちしてきた。

「あんた、いったいどうなってるの。どうしてもっと早く話してくれなかったの？ あのね、私、あのフジクラ夫人ご本人とたくさんお話ししちゃったのよ。美月のこと、とても気に入ってくださっているのね。あんな素敵なお方とこれから親戚づきあいをするなんて、本当に夢みたい。これって、テニスサークルのみんなに自慢しちゃっていいかしら……！」

……って、同情する必要なんてどこにもなかったみたい。

「フジクラ夫人もテニスがとても大好きなんですって。今度軽井沢の別荘で一緒にプレイしましょうって誘われちゃった。どうしよう、美月。早速ウエアを新調しなくちゃ。ううん、シューズもラケットも、それからバイザーも……」

ここまで聞いて、ようやく思い出した。

ウチの母親は、ものすごいミーハーなのだ。女性週刊誌の芸能コーナーもお昼のワイドショーも大好きで、有名人と聞いたとたんに目の色を変えて追いかけていく。知り合いの知り合いの、そのまた知り合いのツテで手に入れたサイン色紙が我が家の居間にはずらりと飾ってある。

そんなお母さんだから浮かれる気持ちにはわかる。わかるけど、少しは疑おうよ、この状況を。

「大丈夫ですよ、お義母様。別荘にはウエアも道具もたくさん揃ってますから。お出かけの際にはどうぞお身体ひとつでいらしてください」

なんか、また余計なことを言ってるよ……

「本日はお義父様にお目にかかれずに残念です。近いうちに一席設けて両家の顔合わせをしたいと思えますので、そのときは是非よろしくお願います」

ちよつと待って！ 誰か、コイツの口を塞いでくれないかな。どんどん話が大きくなって、今に取り返しの付かないことになりそう……！

そんなこんなをしているうちにドアが開いて、何人ものメイドさんがワゴンを押しながら入ってきた。そして次々にテーブルに並べられていく、見たこともないゴージャスな食器たち。

タワーのように何段にも積み重なったお皿には、焼き菓子やクッキー、サンドイッチが盛りされているし、その隣には一抱えほどもありそうな大きなガラス鉢が置かれている。中身はフルーツポンチ、そしてこの器には驚いたことに、盛り分ける器を引っかけるフックまで付いていた。

最後に登場したのは、あの麗しのマダム。先ほどお目にかかったときとはまた違うド

レスをお召しになっている。それもおよそ家用とは思えない、袖口にも裾にもドレープがいつぱい入った、たまらなくゴージャスな一枚だ。

「お待たせいたしました。本日はお近づきの印にお茶をご馳走させていただきます。急なことであったので特別なものはございませんけど、たくさん召し上がってくださいね」

「そんなことはない、こんなに豪華なお茶会、見たことがないよ……！」

その後、延々数時間にわたって続いたお茶会の詳細は、申し訳ないけど割愛させてもらうことにする。とにかくウチの母親のはしゃぎっぷりがすごすぎて、開いた口が塞がらなかつただけ言っておく。

初対面だというのに、雲の上の人とあれだけ打ち解けてしまうなんて、ある意味最強。二十年も一緒に暮らしていた親の知られざる一面を目の当たりにして、実の娘としてはかなりショックを受けた。

フジクラ夫人と韓流スターの話で盛り上がり、一緒に韓国旅行に行く約束までしてるし。お母さん、ホントに大丈夫なのだろうか。

5

窓の外がすっかり暗くなった頃、庭の花壇や噴水のライトアップが始まった。

その頃になって、ようやく「夢の世界」からの帰還を思い立った母親は、フジクラ夫人に見守られながらピカピカのリムジンに乗り込んだ。

もちろん私も一緒に帰ろうとしたんだけど、目の前でさっとドアを閉められてしまう。「それでは、奥様。くれぐれも美月のことをよろしくお願ひします。しつけの行き届かないところばかりでお恥ずかしい限りですが……もうっ、遠慮なんていりませんから、思い切りビシバシとしごいてやってくださいね」

それから、思い出したように私の方を向いて言う。

「美月、頑張ってね。お母さん、あなたを心から応援しているわ」

……やっぱり、居残り決定みたい。しかもそれに答えるフジクラ夫人の嬉しそうな顔。

「んまあ、なんと頼もしいお言葉！ それをお聞きして安心しましたわ。この先は美月さんのことを実の娘と思って厳しく愛情をこめて対応させていただきます」

「はいっ、とにかく頑丈だけが取り柄の娘ですから、ちよつとやそつとじゃへこたれません。煮るなり焼くなり揚げるなり、そちら様のお好きないようにしてください！」

いくらなんでも、そこまで言うことないじゃない。しかしこれって……どういいう状況なの？ もしかして、私、このままこの家に嫁として残るってことは……

「ご心配には及びませんよ、お義母様。美月のことは僕が全力でサポートします。藤倉

家の嫁として誰からも愛されるようにしてみせますので、どうぞ大船に乗ったつもりでいてくださいね」

さらに駄目押し。……もう最悪！

「お父さんと季月には、私から上手く話しておくから。突然結婚したと聞いたら驚くと思うけど、美月は心配しなくていいわよ」

母親を乗せたりムジンが門から出ていったと思ったら、入れ代わりのように一台の車が敷地に入ってきた。

「あらまあ、なんてことでしよう！」

フジクラ夫人が驚きの声を上げるのとほぼ同時に、車は玄関前に静かに止まった。すぐに運転手が降りてきて、後部座席のドアを開ける。

「やあやあ、さては一足遅かったか！ これでも急いで戻ってきたんだが……誠に残念なことだ」

現れたのは恰幅かっぶくのいい男性。

この人は、まさしくフジクラ・コーポレーションの現社長だ。それこそ経済誌の表紙とかテレビコマーションとかでやたらと目にする顔。でも、間近で見るとさすがに迫力がすごい。撫なでつけた髪も額も、どこもかしこもピッカピカに輝いている。

「あなた、いったいどうなさったの。こんなに早くお戻りになるなんて……」

出迎える夫人や使用人の皆さんもとても驚いている様子。しかし、当の本人は周囲の慌てっぷりなどまったく意に介さない。

「いや、会合に向かう途中にちよつと立ち寄っただけだ。巧の花嫁とそのお母上に少しでも早くお会いしたいと思ってな——」

そのとき私は、柱の陰に身を隠すように立っていたのだけど……社長は温厚そうなお顔でぐるりとあたりを見渡し、あつという間に私を見つけ出してしまふ。

その瞬間、きらりーんと瞳が光った。そう、まるで漫画みたいに。

「おおつ、君が巧の大切な人か！ 確か、美月くんとか言ったね？ やあやあ、ようこそ藤倉の家へ。お目にかかれて大変嬉しいよ。君の勇気と行動力には私も心から感服させられた。いや実に素晴らしい！」

いきなり両手を取られてぶんぶんと振り回されたと思ったら、続いてぎゅーっと抱きつかれちゃったりして苦しいっただらない。そのうえ背中を力任せに叩かれるもんだから、もう痛いなのって……！

「ち、父上。どうかお手柔らかにお願いします。あまり乱暴に扱っては、美月が壊れてしまいます」

息もできない状況にもがいていたら、善人モードの彼が助け船を出してくれる。それによってようやく我に返る社長。

「ああ、……いやあ、申し訳ない。嬉しさのあまり、ついつい興奮してしまった。いやはや、年甲斐もなく恥ずかしいところを見せてしまったな」
 「んまあ、あなたってば！ 今日はずいぶんと茶目つ気をお出しになって……ホホホ、お可愛らしいこと」

そこで和やかに笑い合う親子三人。
 いったい、どうなっているんだか。この状況についていけなくて、ひとり戸惑ってしまおう。

「おや、そろそろ時間のようだ。もう行かなくては……！」

胸のポケットから取り出した懐中時計で、時刻を確認したフジクラ社長。さっと身を翻して車の方へ戻っていく。

「慌ただしくて申し訳ないね。美月くん、また日を改めてゆっくり話をしよう。聞いたところによると、君のお父上はかの赤山学院大学の副学長をなさっているとか。実はフジクラも近々教育方面のビジネスに手を広げようと考えていてね、その折には是非お父上にもご助言いただきたいと思っているよ」

いつの間にか、父親の職業までばれている。これもきつと、腹黒男の仕業に違いない。そこまで言うと、彼は私を手招きして、耳元にそっと囁いた。

「なかなかの名演技、感服したよ」

——え……？

後部座席のウインドウがすると上がり、車がゆっくりと発進する。

赤いテールランプが夜の闇に消えても、私は硬直したままだった。

——も、もしかして、バレてる？

頭の中が真っ白の私に、背後にいた男が当然のように言った。

「さあ、美月。そろそろ僕たちの部屋へ行こう。花嫁を迎えるためにと、家の者たちが心を込めて準備した部屋だ。必ず気に入ってくれと思うよ」

ぎよつとして振り向くと、彼は「黙ってついてこい」というオーラを全身から発していた。

一難去ってまた一難だ。

残念ながら、私の本当の立場を知っている人間は、奴を除いてこの屋敷には存在しない。いや、さっきの様子から考えるに、フジクラ社長にはバレてるみただけだ。

さきほどまで「美月さんはもう、私の実の娘同然だから！」なんてはしゃいでいたフジクラ夫人が、もっともらしい顔でおっしゃる。

「そうねえ、そろそろふたりつきりにしてあげないと。なによりも、巧さんが限界でしょう。ええ、いいのよ。夕食のことなど心配しないで、しばらくはお部屋でゆっくりしてちょうだい」